【発表タイトル】

民産官学連携研究拠点・NPO 法人ほのぼの研究所の開設

大武 美保子 准教授（人工物工学研究センター、NPO 法人ほのぼの研究所代表理事・所長）

【発表概要】

2008 年 7 月、高齢社会の諸問題、特に認知症に関する諸問題を解決する科学技術社会システムについて研究し、全世代にとって暮らしやすく生きがいのある「ほのぼの社会」の実現に寄与することを目的とする NPO 法人「ほのぼの研究所」が、開設された。代表理事・所長を務める大武美保子准教授が、設立の趣旨と、具体的な取り組みについて紹介する。

【発表内容】

東京大学柏キャンパスの位置する千葉県柏市では、2008 年 7 月、東京大学と柏市、柏市民、企業の民産官学連携により、認知症予防回復支援サービスを開発し、高齢者を中心とするヒトの認知脳機能を解明する研究拠点・NPO 法人「ほのぼの研究所」（代表理事・所長、大武美保子人工物工学研究センター准教授）を開設した。理事には、大武准教授の他、バイオ情報学やサービス工学を専門とする東京大学の教員、柏市民、福祉機器メーカー技術者、地域医療に携わる医師、慶応義塾大学医学部の医師が参画する。

NPO 法人「ほのぼの研究所」は、大武准教授が考案した、認知症予防回復を支援する新手法「共想法」を中心に、高齢者による高齢者のための認知症予防回復支援サービスの研究開発に、市民、特に高齢者が様々な形で参加する枠組みを提供する。2007 年に研究プロジェクトとして活動を開始して以来、100 名以上の市民参加があった。現在、60 歳代から 80 歳代までの有志十数名が市民研究員となり、84 歳の市民研究員が、人工知能学会で研究発表するなどの成果が得られている。高齢社会のサービスイノベーションが、高齢者が研究を楽しむ新しい文化の中から起こっている。

共想法は、参加者が持ち寄る画像を用いて会話が活発になるよう支援し、認知症の予防回復に役立てる手法である。大武准教授が、認知症者との対話を通じて発案したもので、一般高齢者において、認知症予防のために有効とされる認知機能である、エピソード記憶、注意分割、計画力をバランスよく活用できることが、記憶課題や発話解析などから実証されている。ほのぼの研究所では、共想法の開発と平行して、加齢が認知機能、運動機能に与える影響を解明する基礎研究、共想法プログラムを継続的に開催し、参加者が次の回の開催者に回ることで、高齢者が高齢者に対して認知症予防支援サービスを提供し、高齢者が内側から仕組みを構築する応用研究を行っている。

（ほのぼの研究所については、ほのぼの研究所ウェブサイト
http://www.fonobono.org/
をご参照下さい。）

【連絡先】

大武 美保子 准教授（人工物工学研究センター）